



男

ゆきの

男

「ねえ、いつまでそこに立ってるつもり？」

男に背中を向けて化粧台へ向かいながら、
女は、部屋の片隅にボーっと立ってる男に言い放つ。

「あなたね、未練がましく私の部屋に来るけど、
本当に自分の状況分かってるんでしょうね？」

男は、ただ下を向いている。一言も話す気はないようだ。

「そりゃね、私だって……。悲しいわよ、寂しいわよ」

女は、涙でメイクの落ちかけた頬をぬぐって、
化粧直しをしようと、コンパクトを手に取った。

「でもね……」

コンパクトの鏡の中に男の寂しげな表情がチラッと写る。

「あなたには今度こそ幸せになって欲しいの。分かるわよね？」

男は、また深くうな垂れた。返事とも、落胆の表現とも、どちらにもとれる。

「もう、時間切れなのよ。今日。今日で、本当にお別れ」

今度は、はっきりと、男がこくりとうなずいた。
紫色の大きさに見えるケースから、女は真珠のネックレスを出してつけた。

「ほら、もう、私行くわよ。大事な日なんだから、あなたもついてくるのよ」

「まだ……一緒に、いたかった……」

男はようやく低い声でつぶやいた。

「そうね……」

「菜……穂子、愛してる……」

「私だって、愛してたわよ。ほら、もうこんなお話は終わりにしなきゃ」

部屋にとどまっていたい様子の男に、女は強い口調で言う。

「こんな時間！あなたの家に、先に出かけるわね。今日はあなたの四十九日なんだから……」